

ピカソ「青の時代」の油彩画《青い肩かけの女》の下層に別の人物像を発見

愛知県美術館とワシントン・ナショナル・ギャラリー・オブ・アートおよびフィリップス・コレクションの共同調査により、愛知県美術館蔵パブロ・ピカソ《青い肩かけの女》（1902年制作）の下層に、別の人物像を描いたと思われる描線を発見しました。本調査は、光を波長ごとに細かく分けて撮影できるハイパースペクトルカメラを用いて、非接触、非破壊の分析を行ったものです。

本調査で見つかった下層の人物像は、大きく俯いているように見えます。これは、「青の時代」のピカソ作品に頻繁に登場するポーズの一つです。また、ピカソはこの人物像の輪郭の一部を利用してその上に《青い肩かけの女》を描いていることから、本作はピカソの制作プロセスの一端が垣間見える貴重な事例でもあります。

《青い肩かけの女》は、3月21日より愛知県美術館で開催する2023年度第1期コレクション展に出品します。



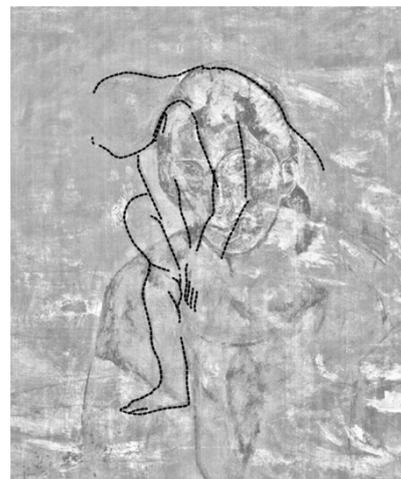
パブロ・ピカソ 《青い肩かけの女》

1902年 油彩、画布

60.3×52.4 cm 愛知県美術館



ハイパースペクトルカメラによる
《青い肩かけの女》赤外線画像



上の画像に点線を補ったもの

*発見までの経緯

・1988年、東海銀行（現・三菱UFJ銀行）が作家遺族より本作を購入し、1992年開館予定の新美術館作品として愛知県に寄贈。

・2014年から2018年にかけて、本作の本格的な光学調査（赤外線、紫外線、エックス線透過、蛍光エックス線等による撮影）を開始したが、明瞭なイメージは得られなかった。

・2022年、「ピカソ：青の時代」展（アート・ギャラリー・オブ・オンタリオ、カナダ、2021年10月6日—2022年1月4日／フィリップス・コレクション、ワシントンD.C.、2022年2月26日—6月12日）に本作を出品中、ワシントン・ナショナル・ギャラリー・オブ・アートおよびフィリップス・コレクションと共同調査を行ったところ、下層に人物像を発見。

※本発見に関する論文を『愛知県美術館研究紀要』29号（2023年2月発行）に掲載しております。

*パブロ・ピカソについて

スペイン南部の町マラガに生まれ、美術教師だった父のもとで早熟の才を発揮したパブロ・ピカソ（1881-1973）は、造形上の革命ともいえるキュビズムを創始し、絵画芸術に新たな地平を拓きました。その後も自在に作風を変え続け、91歳で没するまでおびただしい数の作品を生み出した、20世紀最大の巨匠です。

*《青い肩かけの女》について

深い青色の空間を背に、青い肩かけをまとい、うつろな表情をした女性が静かに佇んでいます。1901年、友人の自殺に強いショックを受けた20歳のピカソは、青い絵具で画面全体を染め上げるようにして悲哀に満ちたモチーフを描き始めました。パリの刑務所に収容された梅毒患者の娼婦や幼子を抱えた母親たち、バルセロナの出稼ぎ労働者たちなど、社会から疎外された人々に目を向けたこの時期は、ピカソの作風の変遷のなかで「青の時代」と呼ばれています。本作もこの時期の一枚で、ピカソが終生手元に愛蔵したのち、孫娘に受け継がれました。

*今後の展示

《青い肩かけの女》は下記コレクション展でご覧いただけます。

2023年度第1期コレクション展 特集「こだまする芸術」

会場：愛知県美術館

会期：2023年3月21日（火・祝）—5月31日（水）

2023年6月30日（金）—9月17日（日）

開館時間：10:00—18:00 金曜日は20:00まで

休館日：毎週月曜日（ただし7月17日〔月・祝〕は開館）、7月18日（火）

観覧料：一般500（400）円、高大生300（240）円、中学生以下無料

お問い合わせ先

愛知県美術館 企画業務課 栗名、副田

電話：052-971-5511（代）